

HARA
原 遺 跡 6

— 原遺跡第14次発掘調査の報告 —

1992

福岡市教育委員会

Aerial photograph showing a rural landscape with a dense network of agricultural fields. The fields are organized into a grid-like pattern, with varying shades of gray indicating different types of crops or soil moisture. Several settlements are visible as clusters of buildings with surrounding land plots. A winding river or stream cuts through the fields in the center-left. In the bottom right corner, there is a small, rectangular area with a light gray background and some dark spots, possibly a water body or a specific type of crop. The overall image has a grainy, historical quality.

湖水



Fig. 1 調査地周辺航空写真(昭和24年5月)

はら 原 遺 跡 6

—原遺跡第14次発掘調査の報告—



平成4年

福岡市教育委員会

序

福岡市はアジア大陸との地理的関係から、先史時代より東アジアとの文化交流の門戸として発展を遂げてきました。このような歴史的背景により市内には各時代の文化財が数多く埋蔵されています。しかしながら、近年の都市の発展に伴う開発により、我々の祖先が地中に残した記録、埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため本市教育委員会では、遺跡を保存すべく各種の開発事業に先立って発掘調査を行ない、記録保存により後世に伝えるように努めています。

今回報告します原遺跡群発掘調査報告書は、給油所建設工事に先立って実施した調査の記録です。この調査では、弥生時代～中世にかけての集落跡等を見いたしました。

今後、本報告書および資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり調査費用を負担していただいた事業者の九州石油株式会社ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会
教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が早良区原6丁目21-35に所在する原遺跡群を1989年（平成元年）5月18日～同年6月31日に発掘調査した記録である。
2. 遺跡名は福岡市教育委員会発行の文化財分布地図一西部II一からによる。
3. 調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が行い、同課職員の瀧本正志が担当した。
4. 本報告書で用いた方位は全て磁北である。この方位は真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
5. 遺構・遺物の実測は高橋健治・大庭友子・瀧本がそれぞれ担当した。
6. 遺構・遺物の写真撮影は瀧本が担当した。
7. 本報告書で報告した発掘調査に係わる遺物・記録類の全ては、福岡市立埋蔵文化財センター（博多区井相田2丁目）に収蔵されているので活用されたい。
8. 本報告書の編集は瀧本が担当した。

遺　　跡　名	原　遺　跡　群（はらいせきぐん）		
遺　跡　略　号	H A A - 14	調　査　番　号	8 9 1 4
調　査　地	福岡市早良区原6丁目21-35		
調　査　期　間	1989年（平成元年）4月18日～同年5月27日		
開　發　面　積	798m ²	調　査　面　積	560m ²

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境.....	3
1. 遺跡の立地と歴史的環境	3
2. 遺跡の概要	4
第3章 調査の記録.....	7
1. 調査の概要	7
2. 弥生時代の遺構・遺物	8
3. 中世の遺構・遺物	10
第4章 まとめ.....	18

挿図目次

Fig.1 調査地周辺航空写真(昭和24年頃)	見返し
Fig.2 遺跡位置図(縮尺:1/200,000)	IV
Fig.3 周辺道路分布図(縮尺:1/25,000)	2
Fig.4 遺跡群地形図(縮尺:1/6,000)	3
Fig.5 調査前状況(西から)	5
Fig.6 調査地全景(西から)	5
Fig.7 造構配図(縮尺:1/150)	折込
Fig.8 調査地周辺地形図(縮尺:1/1,000)	7
Fig.9 調査地周辺航空写真	7
Fig.10 SC-01 捜穴住居址実測図(縮尺:1/50)	8
Fig.11 SC-01 捜穴住居址(西から)	8
Fig.12 SC-01 出土遺物実測図(縮尺:1/5)	9
Fig.13 SK-02 出土遺物実測図(縮尺:1/5)	9
Fig.14 SK-02 出土遺物	9
Fig.15 SB-03 捜立柱建物実測図(縮尺:1/50)	10
Fig.16 SB-03 捜立柱建物(南から)	10
Fig.17 SB-04 捜立柱建物実測図(縮尺:1/60)	11
Fig.18 SB-04 捜立柱建物(北から)	11
Fig.19 SB-04 柱穴出土遺物実測図(縮尺:1/3)	12
Fig.20 SB-05 捜立柱建物実測図(縮尺:1/60)	12
Fig.21 SB-05 捜立柱建物(西から)	12
Fig.22 SB-06 柱穴出土遺物(縮尺:1/3)	13
Fig.23 SB-06 柱穴出土遺物	13
Fig.24 SD-07 淋實測図(縮尺:1/50)	14
Fig.25 SD-07 淋全景(西から)	14
Fig.26 SD-07 淋土層(西から)	14
Fig.27 SD-07 淋出土遺物	15
Fig.28 SD-07 淋出土遺物実測図(縮尺:1/3)	15
Fig.29 SE-08 井戸実測図(縮尺:1/40)	16
Fig.30 SE-08 井戸全景(南から)	16
Fig.31 SE-09 井戸実測図(縮尺:1/40)	16
Fig.32 SE-09 井戸全景(北から)	16
Fig.33 SK-10 土壌出土遺物実測図(縮尺:1/3)	17
Fig.34 SK-11 土壤出土遺物実測図(縮尺:1/3)	17
Fig.35 SK-12 土壤出土遺物実測図(縮尺:1/3)	17
Fig.36 柱穴・土壤出土遺物実測図(縮尺:1/3)	17
Fig.37 調査地周辺航空写真(昭和63年頃)	見返し

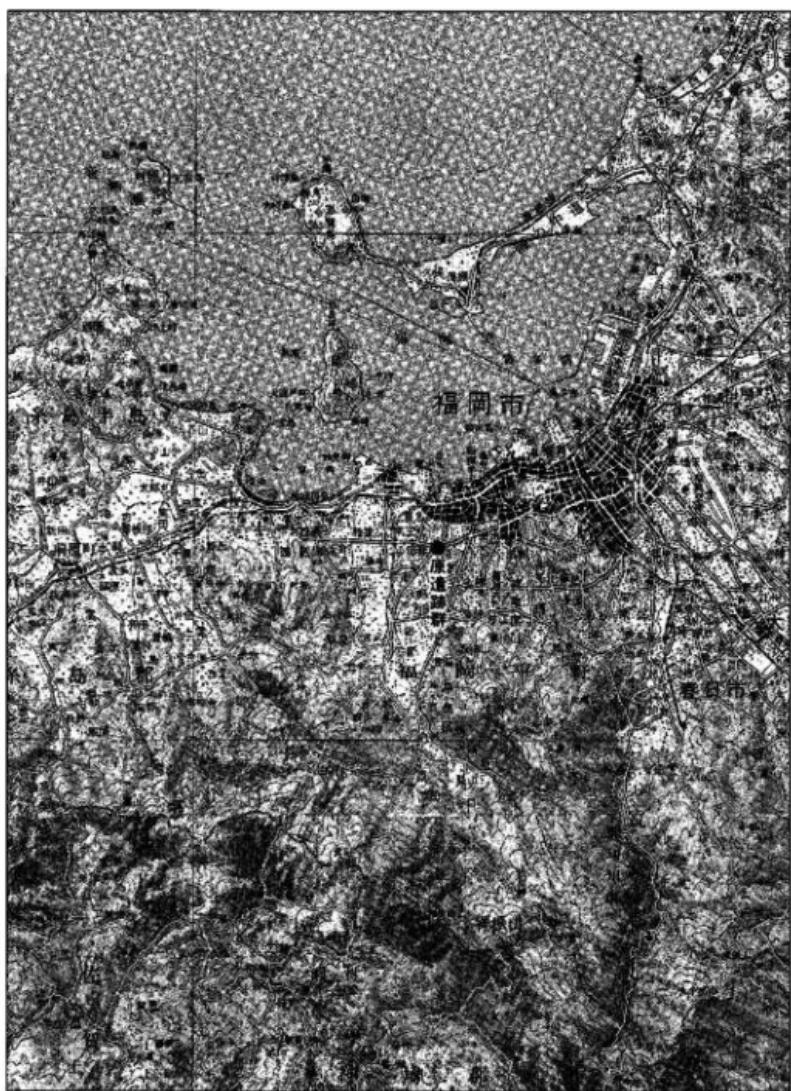


Fig. 2 遺跡位置図 (縮尺: 1/200,000)

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

近年における福岡市は九州の中枢都市として発展を遂げているために人口の増加も他都市に比べて顕著で、1975年（昭和50年）は102万人であったのが、1991年（平成3年）では124万人を数える。この人口増加に伴う住宅建設の多くが、郊外の水田や丘陵の宅地化によって形成されている。このため、幹線道路に面した地点は、これら郊外に居住する人々の利用を対象とした各種の郊外型店によって占められている。当該地も同様である。

1988年2月7日、九州石油株式会社福岡支店から埋蔵文化財課に、同社が所有する早良区原6丁目21-35の給油所改築に伴う埋蔵文化財事前調査依頼の申請が出された。これを受けた同課は、開発予定地が埋蔵文化財包蔵地域（原遺跡群）であること、さらに隣接地において埋蔵文化財が発見（原遺跡群第13次調査）されていることなどから、同年2月8日にバックフォーを用いて試掘調査を実施した。その結果、一部が既存施設の建設時に壊されてはいるものの、地表下70cmにおいて、弥生時代～中世の柱穴・溝等の遺構および遺物が良好な状態で残存していることが判明した。この試掘調査成果を元に埋蔵文化財課は九州石油株式会社と遺跡を保存すべく協議を行ったが、施設の設計変更は困難であることから発掘調査を行い、記録保存を行うこととなった。そして、調査にかかる費用は九州石油株式会社が負担、調査は福岡市教育委員会が行うこととなり、平成元年4月18日から調査に着手した。

2. 発掘調査の組織

調査委託	九州石油株式会社 福岡支店		
調査主体	福岡市教育委員会文化部（現 文化財部）埋蔵文化財課		
教育長	井口 雄哉	佐藤 善郎	（調査時）
文化部長	川崎 賢治	（調査時）	
文化財部長	花田 兎一		
埋蔵文化財課長	折尾 学	柳田 純孝	（調査時）
同課第1係長	飛高 恵雄	折尾 学	（調査時）
調査担当	同課第1係	瀬本 正志	（調査時、現 文化財整備課）
事務担当	同課第1係	吉山真由美	松庭 奴文（調査時）



1. 原遺跡群 2. 元冠防墓群 3. 西新町遺跡群
4. 藤崎遺跡群 5. 有田遺跡群 6. 飯倉遺跡群

Fig. 3 周辺遺跡分布図 (縮尺: 1/25,000)

第2章 遺跡の立地と概要

1. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北半部、博多湾を囲むように位置する平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的・歴史的には丘陵等によって囲まれた幾つかの平野から成っている。この広義的福岡平野の西部を占めるのが早良平野である。早良平野は、西を脊振山から長串山まで連なる山々、東を油山から派生した丘陵によって囲まれた、沖積平野である。平野の形成は、脊振山系に水源を発し、平野中央を北流し博多湾に至る室見川や、その水系に属する大小の河川による。これら河川の流路は国内河川が有する特性を同様に有し、急勾配、短距離を呈している。このため、平野部における丘陵裾部から河川近辺までの土質は砂礫層で、早良平野そのものが扇状地を呈しているといえよう。この沖積平野のほぼ中央には中位段丘である有田・小田部の台地が所在するが、この台地の東側には標高6~7mを測る原の低位段丘がある。この台地は東西長約550m、南北幅250mを測る狭長な微高地である。水田面との比高差は小さく、東側には船塚川が、西側には有田・小田部台地との境に金屑川が流下する。微高地の北側は「塩入・舟底・浮島」などの地名が残っている。かつて河川が大きく湾入しており、藤崎・西新地区は砂嘴状を呈していたと考えられるが、特に南庄地区では、「庄ノ浜」「中ノ浜」「上ノ浜」の地名などもあって、十二町ほどの塙田が存在したことが伝えられている。台地上は縄文時代から中世までの集落が営まれるが、特に弥生時代中期と古墳時代初頭の大集落が近年発見され、それに伴う水田跡としては台地西端の原談義遺跡や台地南側の原深町遺跡などがある。古墳は「人土塚」と呼ばれるものや後期群衆墳も存在しているようであるが、現在は不明である。

周辺の遺跡では東側に細形銅剣を出土した飯倉原遺跡や古墳時代初頭の占領古墳、西側に細形銅戈を出土した堀内墓や弥生時代初頭の環濠を検出した有田遺跡がある。又、北側の海岸には藤崎遺跡の方形周溝墓群や西新町遺跡の古墳時代初頭の集落が存在する。水田跡としては弥生時代の鉢町遺跡や、弥生時代初頭の有田七田前遺跡が知られる。總じて弥生時代~古墳時代を通じて有田遺跡との有機的つながりは密接であり、有田遺跡の集落に対して分村的位置を示している。奈良時代は田部郷に属し、条里遺構は頗著に残っている。中世には在地豪族による名や屋敷の形成が著しいところである。

* 1 井澤洋一著・編『原遺跡2』福岡市教育委員会 1986年

2. 遺跡の概要

原遺跡群では本調査を含めて15ヶ所で実施されている。その結果、発見された遺構・遺物は縄文時代から現代まで連続と続いているが、特に弥生時代中期、平安時代～鎌倉時代に遺跡のピークが見られる。東西600m・南北800mを測る原遺跡が立地する低丘陵に集落が営まれ、丘陵辺部に位置する低地では稻作が行なわれていたようである。この低丘陵の中央部には、丘陵を東西に二分する谷筋が位置することが試掘調査等で確認されている。いまだに集落の様相は明確にされていない。

第1表 原遺跡群調査一覧

調査次数	調査地	調査面積	調査期間	調査原因
第1次	早良区大字原城後・田中尾	3,584m ²	1975年 7月～9月	商業ビル建設
第2次	早良区原6丁目632-1	2,280m ²	1979年 2月～3月	共同住宅建設
第3次	早良区大字原深町588-1	3,000m ²	1979年 8月21日～12月20日	小学校建設
第4次	早良区原6丁目826-1・2	850m ²	1980年 7月 4日～8月 2日	共同住宅建設
第5次	早良区原6丁目635	3,312m ²	1981年 8月26日～9月30日	共同住宅建設
第6次	早良区原6丁目825-2	900m ²	1982年 5月20日～6月30日	共同住宅建設
第7次	早良区原6丁目875-1	2,000m ²	1982年11月15日～12月25日	共同住宅建設
第8次	早良区原6丁目805	600m ²	1984年 7月18日～8月21日	個人専用住宅
第9次	早良区原8丁目1171-3	2,900m ²	1984年11月21日～1985年1月23日	分譲住宅建設
第10次	早良区原5丁目1225-7他	5,241m ²	1987年 5月23日～10月31日	市営住宅団地建設
第11次	早良区原6丁目他	3,584m ²	1988年 4月23日～1989年3月23日	下水道整備工事
第12次	早良区原6丁目859-1	450m ²	1988年 8月23日～10月17日	共同住宅建設
第13次	早良区原6丁目660-2他	80m ²	1988年10月24日～10月31日	共同住宅建設
第14次	早良区原6丁目632-11	550m ²	1989年 4月18日～5月27日	輸油所建設
第15次	早良区原6丁目他	550m ²	1989年 4月 1日～1990年3月31日	下水道整備工事

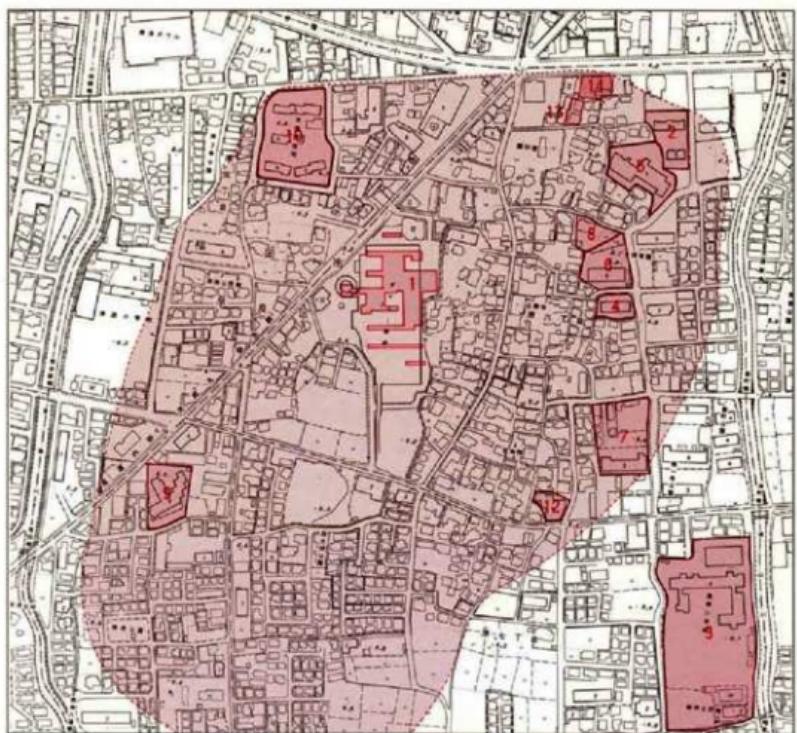


Fig. 4 遺跡群地形図（縮尺：1/6,000）



Fig. 5 調査前状況（西から）

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地には既存の給油所があった。そのため建設のさいの整地作業等で、一部遺構面を含む表土層は搅乱を受けていた。このために、バックフォーにより表土および搅乱部分の除去を行なった。

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。調査地の基本的層序は、上から整地土、茶褐色粘質土、黒灰色粘質土、黄褐色粘質土である。地山の黄褐色粘質土は調査区北側ではやや緑系を呈する。各層とも均一に堆積しているが、僅かに北、西方向に傾斜する。これは、調査地が、遺跡群の立地する低丘陵の西北端部に位置することによる自然地形に合致する。遺構はすべて当該地の地山である黄褐色粘質土上面で検出した。検出した遺構は弥生時代の土坑1・竪穴住居址1・小穴、中世の掘立柱建物4棟・柵列2条・井戸2基・溝1条・土坑・柱穴・小穴等である。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・磁器・瓦器・滑石製品が出土しているが、大半が小片で全形を知りえない。

遺構面の西北部は既存施設の建設時に削平を受けていた。



Fig. 6 調査地全景（西から）

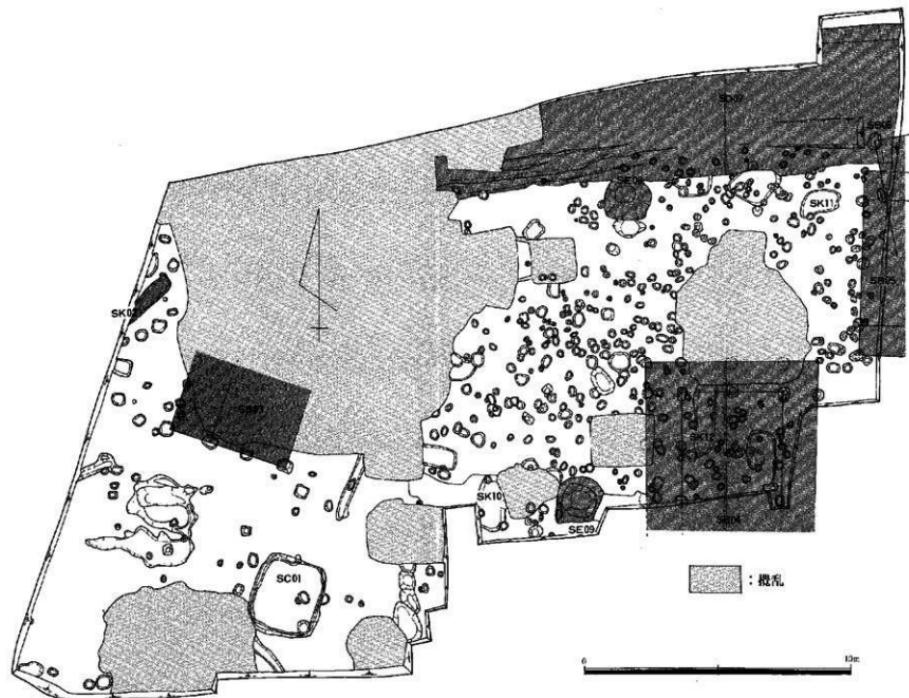


Fig. 7 造構配置図 (縮尺: 1/150)

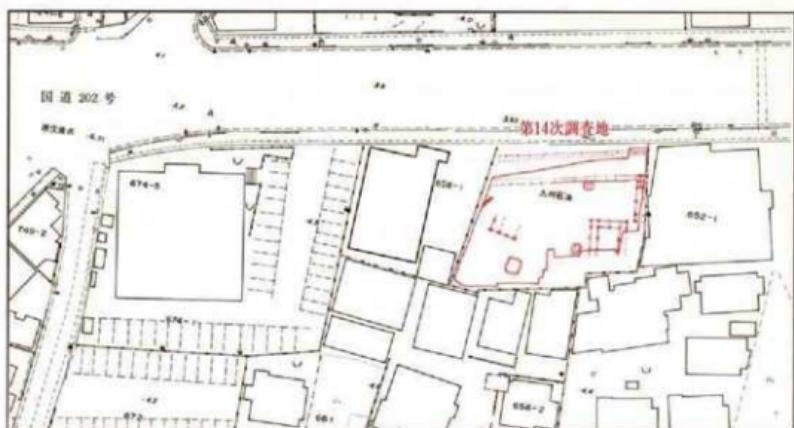


Fig. 8 調査地周辺地形図（縮尺：1/1,000）



Fig. 9 調査地周辺航空写真（昭和63年頃）

弥生時代の遺構と遺物

竪穴式住居址

SC01 (Fig. 10~12) 調査区南辺中央部に位置する。隅丸方形の平面計を呈した竪穴住居址である。南北方向に長軸を有し、短辺2.6m・長辺3mを測る。壁高は25cmを測り、直に立ち上がる。床面には壁際に沿って溝が巡る。溝の深さは5cm前後を測るが、幅は10~20cmを測り均一ではない。床面での炉跡、粘土貼付け等は認められない。柱穴は、床面・住居址の周

りでも確認されなかった。

遺物は、覆土中から壺等の弥生土器が出土している。**1**は壺の口縁部の破片で、32cmの口径が復原されるが、器高は不明。口縁部は、端部を「く」の字状に外反させた後に内側に折り曲げて成形している。胎土には1mm程の長石・石英砂粒を多く含む。**2**は壺の底部の破片で、全形は不明。外面には縦方向の刷毛目が残る。胎土には1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む。

土坑

SK02 調査区北西辺部で検出した溝状の遺構で、幅40cm前後・深さ5~12cmを測る。北東方向に中心軸をとり、北東端部は緩やかに立ち上がり、南西端部は調査区外に続く。

覆土中からは壺を中心とした弥生土器が出土している。3~6は壺の口縁部と底部の破片。**3**は復原口径26cm、器高は不明。口縁部は鋭く「く」の字状に外反させ、端部は横ナデによって丸味を持つ。口縁部外面には断面形が3角形を呈する1条の貼付凸帯がめぐる。整形は、外面が縦方向の刷毛目により、内面は磨滅により不明。胎土には1mm程の長石・石英砂粒を多く含む。**4**は復原口径28cm、器

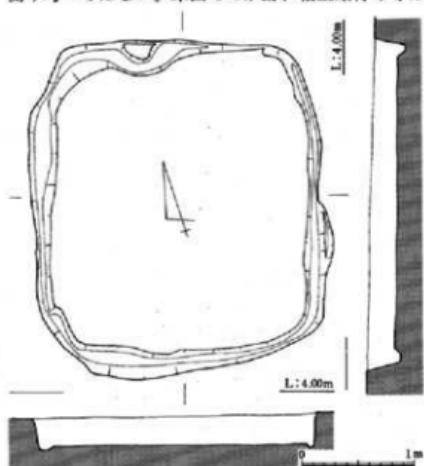


Fig. 10 SC01 竪穴住居址実測図（縮尺：1/50）



Fig. 11 SC01 竪穴住居址（西から）

高は不明。口縁部は鋭く「く」の字状に外反させ、端部は横ナデによって丸味を持つ。口縁部外面には断面形が3角形を呈する1条の貼付凸帯がめぐる。整形は、外面が綫方向の刷毛目により、内面は磨滅により不明。胎土には1mm程の長石・石英砂粒を多く含む。**5**は底部径8cm、器高不明。外面には幅2mmほどの刷毛目が綫方向に残る。胎土には1~2mm程の長石・石英砂粒を多量に含み、色調は淡灰褐色を呈しているが、他の出土遺物と様相を異にする。**6**は底部径7cm、器高不明。外面には幅1mm程の刷毛目が綫方向に残る。胎土には1~2mm程の長石・石英砂粒を多量に含み、色調は褐色を呈している。他の壺の破片も、同様な特徴を有している。しかし、壺の中でも大きく二に分かれる。一方は器の整体が1cmを越えるほど厚く、胎土に長石・石英砂粒を多量に含むのに対し、他方は整體が5mmほどで、胎土に長石・石英砂粒を前者ほど含まない。

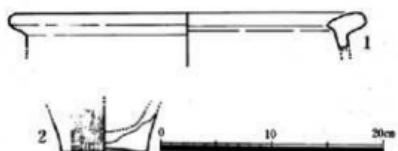


Fig. 12 SC01 出土遺物実測図 (縮尺: 1/5)

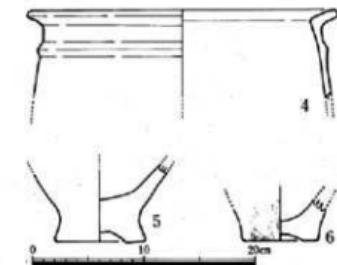
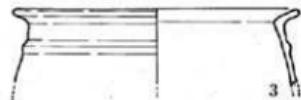


Fig. 13 SK02 出土遺物実測図 (縮尺: 1/5)

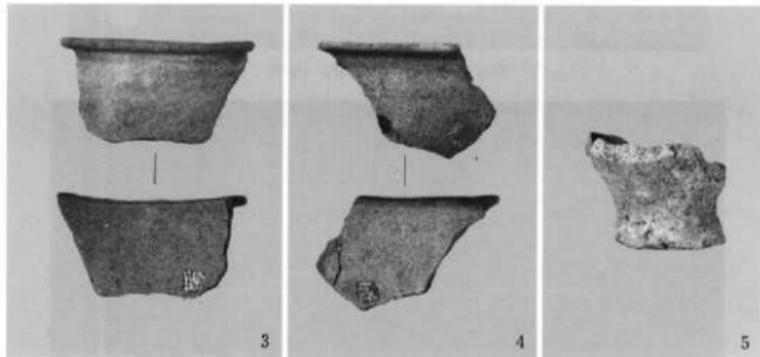


Fig. 14 SK02 出土遺物

中世の遺構と遺物

掘立柱建物

SB03 (Fig.15~16) 調査区西半分中央部に位置する南北棟の掘立柱建物である。南側梁行側柱を検出したが、北側部分は搅乱で不明。梁行3間、桁行3間以上が推定される。梁行総長は4.5m(15尺)、柱間は梁行1.5m(5尺)、桁行1.8m(6尺)を測る。柱掘形は隅丸方形もしくは梢円形の平面形を呈し、方35~50cmを測る。

SB04 (Fig.17~19) 調査区東南部に位置する南北等の掘立柱建物である。梁行2間×桁行3間以上の身舎とその四面に廻が取り付く。建物の南半部は調査区外に広がる。身舎は梁行総長は3.8m、桁行総長6m以上、柱間は梁行1.9m、桁行2.0mを測る。廻梁行4間、桁行5間

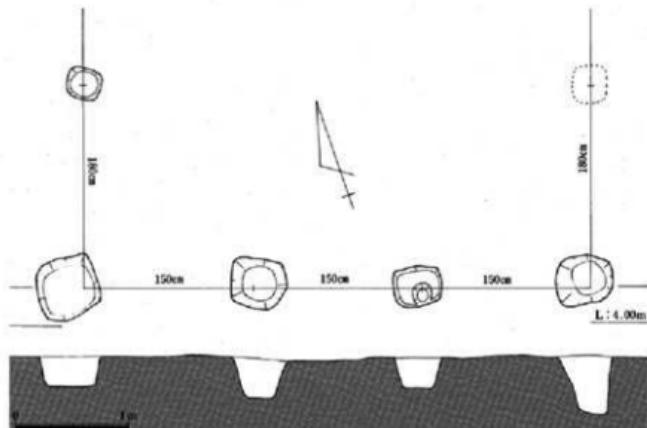


Fig.15 SB03 堀立柱建物実測図（縮尺：1/50）

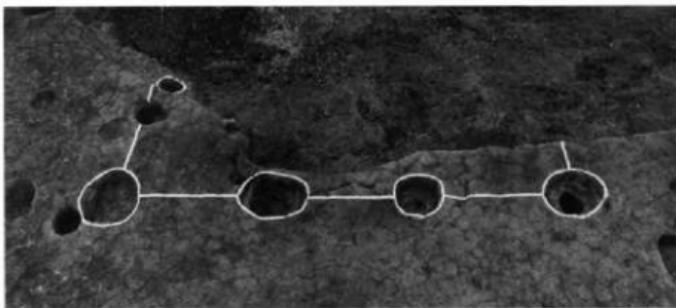


Fig.16 SB03 堀立柱建物（南から）

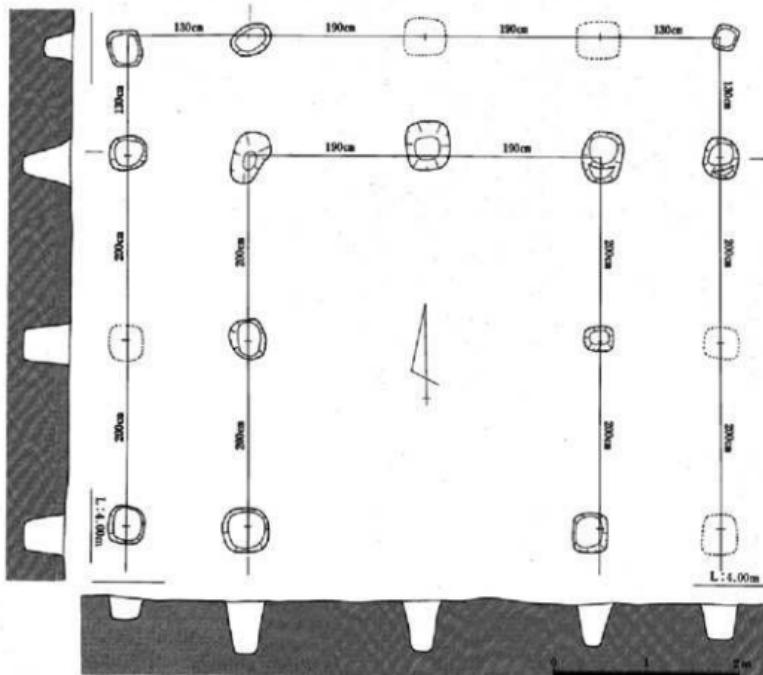


Fig.17 SB04 堀立柱建物実測図 (縮尺: 1/60)

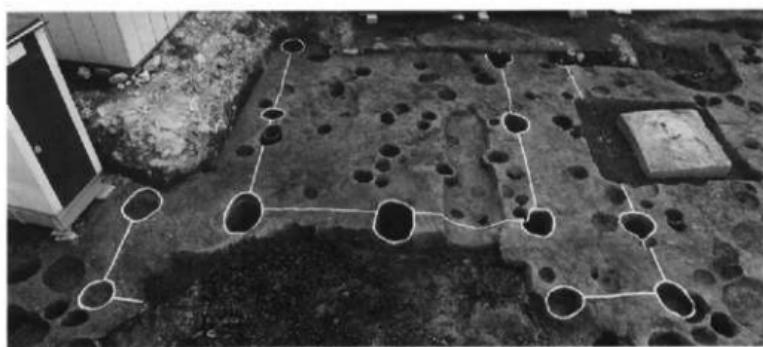


Fig.18 SB04 堀立柱建物 (北から)

以上、梁行総長は6.4m、桁行総長8.6m以上を測る。身舎と廊との柱間は1.3mを測る。柱掘形は隅丸方形もしくは梢円形を呈し、方35~50cmを測る。身舎と廊の柱掘形では、身舎の柱掘形底部高が一定であるのに対し、廊の柱掘形底部高はいずれも身舎より高く、掘りが浅い。柱掘形埋土からは土師器、瓦器等が出土している。7は瓦器椀の口縁部破片で全形を知りえない。

復原口径は16cm、器高は不明。口縁部は球状を呈し、口縁端部は丸味をもつ。内外面には横向向の施磨きが施されている。口縁端部は外面とも黒色を呈し、重ね焼きを伺わせる。

SB05 (Fig.20・21) 調査区東辺部中央部に位置する東西棟の掘立柱建物である。建物の棟筋はSB04と直交する位置にある。今回検出したのは建物の東梁行部分だけで、建物の大半は調査区外に位置する。建物は梁行2間の身舎、そして身舎の南北の両面、すなわち桁間に廊が取り付く。柱間は、身舎の梁行は2.3m、廊は1.2mを測る。柱掘形は隅方丸形もしくは梢円形を呈し、方30~50cmを測る。柱掘形底部高はFig.20に示すようにばらつきがある。部分的検出の

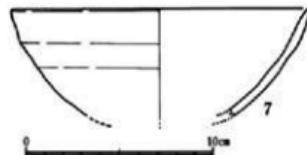


Fig.19 SB04 柱穴出土遺物実測図
(縮尺: 1/3)

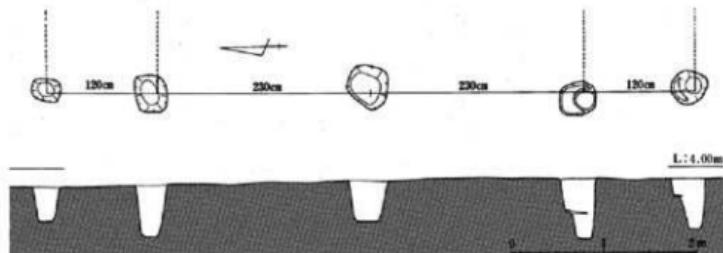


Fig.20 SB05 堀立柱建物実測図 (縮尺: 1/60)

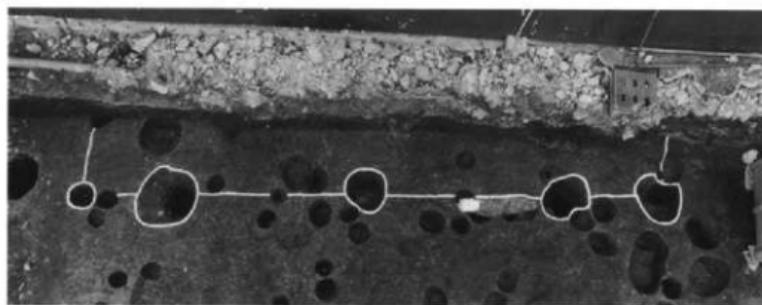


Fig.21 SB05 堀立柱建物 (西から)

ため、建物が身舎の四面に廟が設けられている可能性も否定できない。柱掘形の覆土からは、土師器（壺・皿）、青磁器（碗・皿）が出土している。

SB 06 (Fig.22・23) 調査区東辺部中央、SB05の北に位置する東西棟の掘立柱建物である。検出したのは建物の西隅、2か所の柱穴だけである。建物の大半は調査区外に位置しており、規模は不明である。建物棟筋はSB05より北に13°偏する。柱掘形は隅丸方形もしくは梢円形の平面形を呈し、方50～60cmを測る。柱掘形からは土師器（壺・鍋）が出土している。**8**は建物の西北隅に位置する柱掘形埋土から出土した土師器の鍋である。底部はやや欠くがほぼ全形を知ることができる。口縁部は外径21cm、内径17cm、器高は11.5cmを測る。底部は球状、体部はほぼ直立し、口縁端部外面には「く」の字状に外反する鉄状の凸帯がつく。外面には厚く煤が付着しており整形・調整の方法は知ることができない。内面はナデが施されている。胎土には1～2mm程の長石・石英砂粒を僅かにみ、色調は暗茶褐色を呈している。

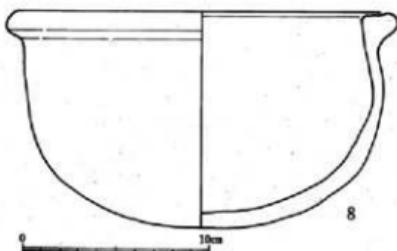


Fig. 22 SB06 柱穴出土遺物 (縮尺: 1/3)



Fig. 23 SB06 柱穴出土遺物

溝 1条の溝を検出した。

SD07 (Fig.24~28) 調査区北辺に位置する東西溝である。総長18m部分を検出した。幅5.2m、深さ0.3mを測り、岸は弧を描きながら緩やかに立ち上がる。溝の東・西端部は調査区外に続く。覆土は暗茶褐色粘質土の一層のみで、溝底に砂粒などの堆積は認められない。堆積状況は溝が一度に埋められた様相を呈しているといえよう。覆土中からは、弥生土器(甕)、土師器(碗)、瓦器(碗)、須恵器(壺)、青磁器(碗)、滑石製品(鍋)、壁土が出土している。弥生土器はコンテナ箱に1/2ほど出土しているが、その大半が甕の破片である。いずれも小片で全形を知ることはできない。底部は径5~8cmほどを測る平面を呈し、口縁部は鋭く「く」の

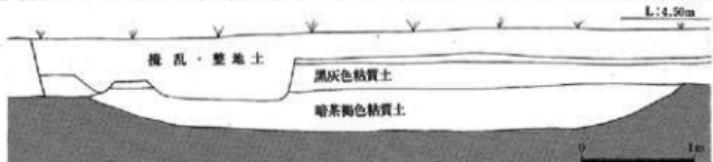


Fig. 24 SD07 溝実測図 (縮尺: 1/50)

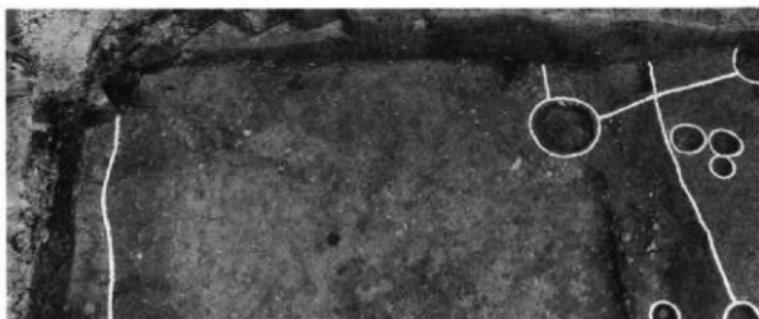


Fig. 25 SD07 溝全景 (西から)



Fig. 26 SD07 溝土層 (西から)

字状に外反し、口縁端部は横ナデにより丸味をもつ。外面には縦方向の刷毛目が残る。壺棺の破片も3片が出土している。全形は不明であるが成人用の大きさであろう。外面には2条の貼付凸帯が施されている。器種は不明であるが、外面に赤色顔料で彩色している破片も出土している。**9**は土師器の小皿である。SD07から小皿は多く出土していない。復原口径7cm、器高1cmを測る。色調は赤褐色を呈している。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。**10・11**は瓦器碗である。**10**は口縁部の破片で復原口径は17cm。体部は球状が想定される。口縁端部は横ナデ調整が施され、僅かに外反する。外面には成形時に指頭で押圧した痕跡が残り、型作りを示唆する。胎土には0.5~1mm程の長石・石英砂粒を多く含む。**11**は口縁部を欠く。底部は球状を呈する。内外面には部分的に竈磨きが施されている。高台は粘土紐による貼付高台で、高台口径は7cmを測る。**12**は須恵器の壺である。口縁部等を欠く。底部径は16cm。胎土には砂粒はほとんど認められない。良く焼きしまっており、器面は暗青灰色、内部は暗セピア色を呈する。**13**は青磁碗で、口縁部を欠く。外面には拂目が施されている。石製品は石鍋であるが、全て破片で全形を知りえない。石鍋の材質は滑石製であるが、色調から白色系と暗青灰色系の2種類に分かれる。**14**は18cmの底部径が復原される。器面の内外面には成形時の削り痕跡が残る。厚さは底部で2cmを測る。外面には煤が付着する。**14**を含む石鍋の共通した特徴は、内面調整が丁寧に行なわれているのに対して、外面には成形時の削り痕跡が認められるように調整が行なわれていないか、若しくは粗い。



Fig. 27 SD07 溝出土遺物

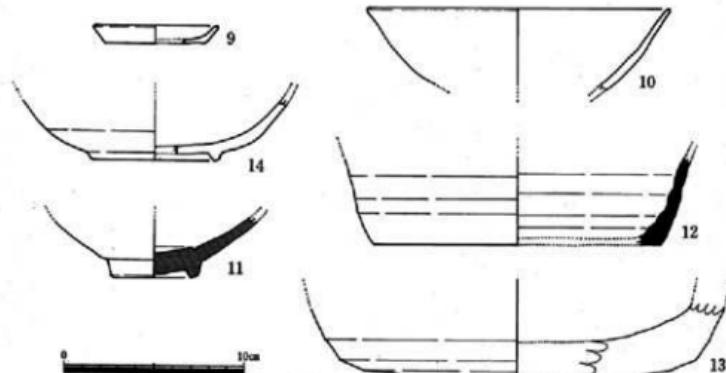


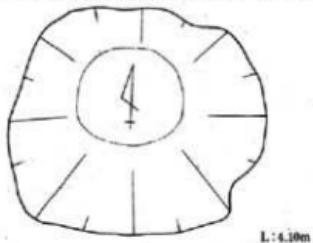
Fig. 28 SD07 溝出土遺物実測図 (縮尺: 1/3)

井 戸 2基の井戸を検出した。

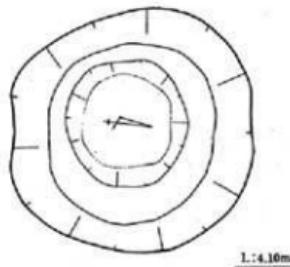
SE08 (Fig.29・30) 調査区北辺中央部に位置する井戸である。掘形は不整形な円形を呈し、上面で径1.8m、底面で0.7mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ1mを測る。井筒等は認められない。覆土中からは、土師器(皿・壺)、須恵器(壺)、瓦質土器(椀)、青磁器(碗)、壁土が出土している。

SE09 (Fig.31・32) 調査区南辺中央部に位置する井戸である。掘形は円形を呈し、径1.7mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ1.5mを測る。

井筒等は認められない。覆土中からは、土師器(皿・壺)、白磁器(碗)、滑石製品(鍋)が出土している。



L:1.80m



L:1.80m



1m



0 1m

Fig.29 SE08 井戸実測図(縮尺:1/40)

Fig.31 SE09 井戸実測図(縮尺:1/40)

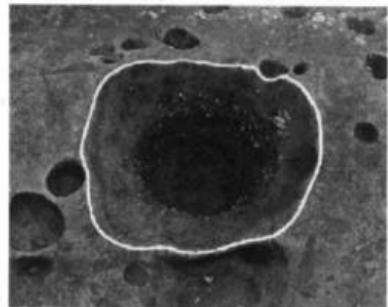


Fig.30 SE08 井戸全景(南から)

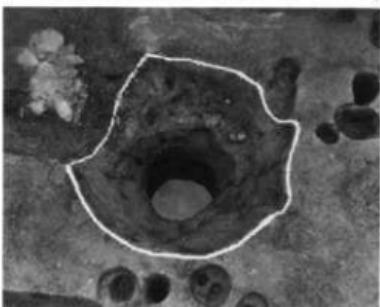


Fig.32 SE09 井戸全景(北から)

土坑

SK 10 (Fig. 33) 調査区南部中央に位置する。楕円形の平面形を呈し、東西1m・南北2m・深さ10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。**15**は土師器の壺である。口径14cm・底径10cm・高さ3cmを測る。口縁部は外反しながら直立し、端部は横ナデ調整により丸味をもつ。底部外面には糸切り痕跡が残る。内面はナデ調整。

SK 11 (Fig. 34) 調査区東北部、SD01の南に位置する。楕円形の平面形を呈し、東西1.4m・南北1m・深さ15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。**16**は青磁器の碗である。底部を欠き、口径16cm、器高不明。口縁端部近くで外反する。胎土は白色、釉は乳灰色。

SK 12 (Fig. 35) 調査区東南部、SB04とほぼ同じ地点に位置する。楕円形の平面形を呈し、東西0.8m・南北2.5m・深さ20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底は南側に向かって浅くなる。**17**・**18**は白磁の碗である。**17**は口禿げの碗で、口径12cmを測る。胎土は白色、釉は乳灰色。**18**は口径16cmを測る。胎土は白色、釉は乳灰色。口縁端部は断面形が三角形状に外側に張り出す。**19**は青磁碗である。口径16cmを測る。内面にはヘラ掘り草花文が施されている。胎土は青灰色、釉はオリーブ色。

柱穴 (Fig. 36) 数多くの柱穴が検出されたが、建物遺構を復原するには至らなかった。本報告書で記載したもの以外に、構・掘立柱建物等が存在していたものと思われる。**20**は土師器の壺。**21**は白磁の碗。口径21cmを測るが器高は不明。口縁端部は外反する。胎土は白色、釉は乳白色。

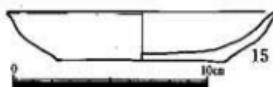


Fig. 33 SK10 土壌遺物実測図 (縮尺: 1/3)



Fig. 34 SK11 土壌遺物実測図 (縮尺: 1/3)

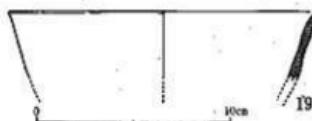


Fig. 35 SK12 土壌遺物実測図 (縮尺: 1/3)

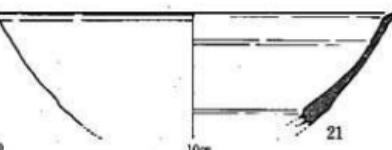
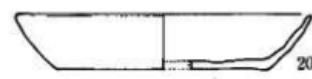


Fig. 36 柱穴・土壌遺物実測図 (縮尺: 1/3)

第4章 まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡、溝、掘立柱建物等の弥生時代～中世における遺構、遺物を発見した。この中で特徴的なことを記述してまとめとしたい。

弥生時代の原遺跡群

これまでの調査では、調査地が遺跡の立地する低地段丘の縁辺を中心でもあったことから、集落・墓という直接的遺構は認められていなかった。これまでには、残片的に弥生時代の遺構・遺物が検出されており、遺構の存在を強く示唆するものであった。今回の調査では、方約2mを呈する竪穴住居跡一棟と土壙を検出した。出土遺物、特に土器の特徴から遺構の造営時期は時期的には弥生中期末期頃と比定される。遺構の残存状態は良好とはいえない。住居跡壁高が20cm～30cmを測るところから、後世の削平がいらじるしかったことをうかがわせる。遺跡の北区に位置する、本調査地の標高が約4.4mを測り、遺跡の中央部では標高約6mを測っていることから本調査地の南西約30mに位置する地点で第13次調査が実施され、顯著な遺構は確認されていないが、弥生時代中期の遺物が発見されている。以上のことから、原遺跡群内において弥生時代中期を中心とした集落が存在した可能性は高い。今後の中心部における調査の結果を待ちたい。

中世の原遺跡群

今回の調査では、当該期の遺構としては、掘立柱建物・井戸・土壙・小穴・東西溝等がある。時期的には不確定な遺構もあるが、大半は、10世紀～14世紀に造営されたと思われる。調査区北区で検出したSD01は、溝の延長部において、同様な溝状遺構が検出されている。時期的には、出土遺物から、8・9世紀～12世紀を比定している。本調査では明確に時期を特定しうる資料は出土していない。遺構の性格としては、条革地剤に關連するものとして指摘されているが、本調査区内における溝底では流水の砂の堆積等が認められなかった。第10次の調査例では砂の堆積が指摘されており、この差異は興味深い。この状況の違いは、有田、小田丘陵とを画す金屑川や低位段丘に入り込んだ小さい谷によって分断される。扇を有する掘立柱建物および井戸の存在は中世集落の存在を明らかにするものであろう。掘立柱建物には主軸がSD01と平行もしくは直交する位置関係にある建物と核とする建物等が認められるが、建物の多くが調査外に広がっているために、個々の建物の状況（規模）については不明である。柱穴等については多数を検出したが、個々の建物としては確認することはできなかった。今後、周辺の調査を待って再検討したい。

原遺跡群周辺主要遺跡調査報告書

- 福岡市教育委員会「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
福岡市教育委員会「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集 1989年
福岡市教育委員会「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集 1989年
福岡市教育委員会「生松台」福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集 1990年
福岡市教育委員会「野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
福岡市教育委員会「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986年
福岡市教育委員会「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 1988年
福岡市教育委員会「羽根戸遺跡古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集 1989年
福岡市教育委員会「弓多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974年
福岡市教育委員会「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971年
福岡市教育委員会「下山門遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973年
福岡市教育委員会「下山門乙女田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集 1987年
福岡市教育委員会「都地・七反田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集 1990年
福岡市教育委員会「橋本一丁目遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集 1990年
福岡市教育委員会「久永古墳群発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集 1971年
福岡市教育委員会「影原1号墳発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1971年
福岡市教育委員会「能永アラク古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 1980年
福岡市教育委員会「重要遺跡確認調査報告1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 1981年
福岡市教育委員会「承留C郡第1号墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集 1983年
福岡市教育委員会「承留遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会「原遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会「原遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
福岡市教育委員会「原遺跡3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集 1990年
福岡市教育委員会「原遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第233集 1990年
福岡市教育委員会「有田・小川部14・原遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集 1991年
福岡市教育委員会「有田七日浦遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 1983年
福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年
福岡市教育委員会「有田・小川部第1集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年
福岡市教育委員会「有田・小川部第2集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集 1982年
福岡市教育委員会「有田・小川部第3集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982年
福岡市教育委員会「有田・小川部第4集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983年
福岡市教育委員会「有田・小川部第5集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集 1984年
福岡市教育委員会「有田・小川部第6集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年
福岡市教育委員会「有田遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集 1986年
福岡市教育委員会「有田・小川部第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986年
福岡市教育委員会「有田・小川部第8集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 1987年
福岡市教育委員会「有田・小川部第9集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988年
福岡市教育委員会「有田・小川部第10集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 1989年
福岡市教育委員会「有田・小川部第11集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集 1990年
福岡市教育委員会「有田・小川部第12集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集 1991年

- 福岡市教育委員会「有田・小田部第13集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第265集 1991年
福岡市教育委員会「西部地区埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981年
福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982年
福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984年
福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987年
福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987年
福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅴ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988年
福岡市教育委員会「田村道路Ⅵ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 1989年
福岡市教育委員会「田村道路Ⅶ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1990年
福岡市教育委員会「拾六町ワジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983年
福岡市教育委員会「次郎丸高石道跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981年
福岡市教育委員会「四箇所近道跡調査報告書(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977年
福岡市教育委員会「四箇所近道跡調査報告書(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978年
福岡市教育委員会「四箇所近道跡調査報告書(3)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980年
福岡市教育委員会「五箇所近道跡調査報告書(4)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1977年
福岡市教育委員会「西筒井辺道跡調査報告書(5)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 1981年
福岡市教育委員会「四箇道跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987年
福岡市教育委員会「四箇道跡群第23次調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集 1989年
福岡市教育委員会「四箇道跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集 1989年
福岡市教育委員会「古武塚原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980年
福岡市教育委員会「古武道跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986年
福岡市教育委員会「吉武高木・糸生古代葬送路の調査概要」福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986年
福岡市教育委員会「吉武遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988年
福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989年
福岡市教育委員会「今山遺跡(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1973年
福岡市教育委員会「今山・今宿遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981年
福岡市教育委員会「今宿五郎江遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986年
福岡市教育委員会「藤崎道路Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
福岡市教育委員会「藤崎道路Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982年
福岡市教育委員会「藤崎道路Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 1986年
福岡市教育委員会「藤崎道路Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集 1986年
福岡市教育委員会「藤崎道路Ⅴ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第232集 1990年
福岡市教育委員会「縣道大野二枝線関係埋蔵文化財調査報告書(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集 1980年
福岡市教育委員会「入部Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990年
福岡市教育委員会「入部Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集 1991年
福岡市教育委員会「脇山Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 1990年
福岡市教育委員会「脇山Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 1991年
福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970年
福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集」 1973年
福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976年
福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前道路A~D地点」 1971年



(SB04と調査に協力くださった皆さん)

大庭友子、高橋健治（現 平尾中学校教諭）

井口菊太郎、牛尾シキヨ、牛尾豊、尾崎達也、尾崎八重、倉光ナツ子、
柳光雄、正崎由須子、白坂フサヨ、典略初、林嘉子、真名子ユキエ、
結城シズ、結城千賀子、結城信子、結城弥澄、臨坂武実、青柳恵子、
池村留美、上田裕子、牛尾美保子、内山孝子、尾崎京子、齊藤美紀枝、
藤アイ子、日名子節子、藤吉芽里、真名子順子、渡辺ちづこ、飯田智子
発掘調査では以上の方々の他に多くの方々にご協力いただきました。

原 遺 跡 6

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第295集

1992年（平成4年）3月13日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 セントラル印刷株式会社



調査地





Fig.37 溝辺地区現状写真(昭和63年頃)

